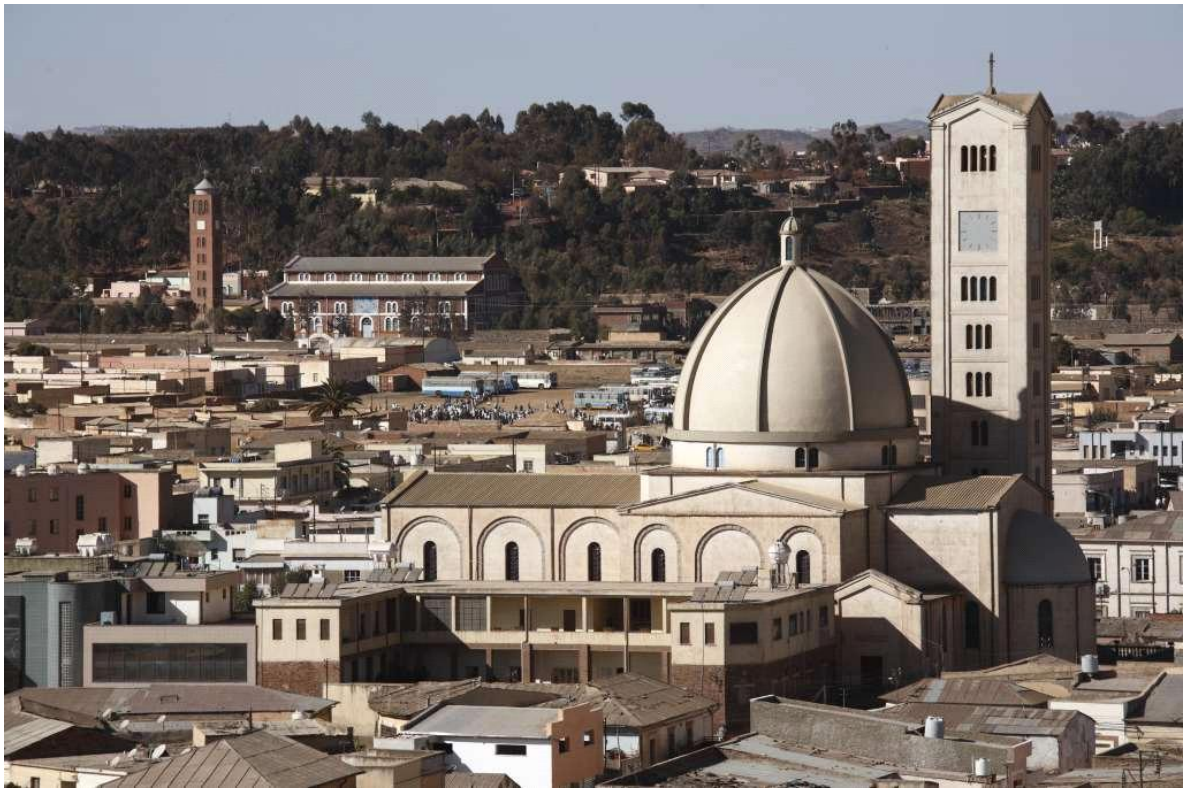
Welcome to Asmara, Heart of Eritrea!

ASMARA



標高 2350m に位置するアスマラは、年間平均気温が 17℃と、冬季（11～1 月）でも半袖で過ごせる穏やかで快適な気候です。古より商業の中心地でしたが、首都になったのは 1897 年のことです。1890 年にイタリアの植民地になりますが、イタリアのアフリカ大陸進出の橋頭堡と位置づけられ、「第二のローマ」として大規模に開発が行われてきました。そのため、現在でも、世界有数の規模で 1920～1930 年代のイタリア・アールデコ建築が残されている“建築の都”となり、これらは世界遺産登録準備が進められています。

ブーゲンビリアやジャカランダが咲き乱れる街角には、美しい煉瓦作りのヴィラや、斬新な現代建築があちこちに見られ、イタリアの文化遺産とアフリカの風土が溶け合った独特の魅力を醸し出しています。古来よりさまざまな宗教が共存してきた街でもあり、カトリック大聖堂、モスク、テワフド教会（エリトリア正教会）、シナゴーグなどが立ち並ぶ風景からは、異文化に寛容な懐の深い都市の魅力が感じられます。

農業国であるエリトリアはまた、豊かな食文化を誇り、伝統料理のツアビィやインジェラ、蜂蜜酒や、地ビールに地ワインなどが楽しめます。伝統行事も盛んで、１月と９月の祭礼には、白い民族衣装に身を包んだ街の人々が、極彩色の礼服をまとった聖職者たちと美しいコントラストを描きながら、聖なる泉を目指して街を練り歩きます。歴史が息づき、文明が交差するアフリカのコスモポリス、アスマラへようこそ！

アスマラのみどころ

■■■聖マリア・コプト教会　Nda Mariam

1913 年に建てられたエリトリアとヨーロッパが見事に融合した教会です。聖母マリアを祭ったテワフド（エリトリア正教）の教会で、正面の壁画が特に有名です。教会建築は、左右の塔と中心部からなり、塔の白い頂上部には鐘が設置されています。中央の印象的なモザイク画は、1950 年代にイタリア人画家 Nenne Sanguineti Poggi が描いた宗教画です。教会内部には、キリストの人生と新旧聖書の場面からとられた十二使徒の壁画があります。また、教会正面には大きな石でできた伝統的な鐘があり、今も神秘的な音色を奏でています。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

■■■カトリック大聖堂　The cathedral

アスマラの大聖堂は、ロンバード-ロマネスク様式で 1922 年に建てられた威風堂々としたカトリックの聖堂です。アスマラの目抜き通りであるハルネット通りに面し、街の顔となっています。高いゴシック様式の鐘楼は、アスマラ市内のどこからでも臨め、道に迷った時の便利なランドマークとなっています。この塔にはガイドの案内があれば登ることができ、市街の素晴らしい眺めが一望できる場所となっています。聖堂は、男子・女子修道院でもあり、小学校と共に同敷地内に設置されています。

■■■モスク　Al Khulafa Al Rashiudin

The great mosque とも呼ばれる、マーケット近くのピース・ストリートにある Al Khulafa Al Rashiudin（“正しい道の花”）モスクは、1938 年に建てられたものです。ムーア様式とローマン様式が融合した珍しい建築となっています。モスクの建築には、エリトリアのデケムハレ産のトラバーチンとカララ産の大理石が使われています。モスク正面には、ダークストーンのブロックが幾何学模様に敷き詰められた広場があり、タクシーや地元の人々の溜まり場となっています。

■■■シナゴーグ　Synagogue

1905 年に建てられた古いシナゴーグの存在は、かつてエリトリアに住んでいた 500 人を超えるユダヤ人たちの歩みを今に伝えています。エリトリアのユダヤ教徒たちは、最初はトルコから、後にはイタリアやアデンからエリトリアに移民してきたと言われています。
また、市場の南側には、同じく 20 世紀初頭に建てられたギリシャ正教の教会も残っており、狭い区画にさまざまな宗教施設がひしめくさまは、多様な宗教が長らく平和に共存してきたアスマラの街の歴史がうかがえます。

■■■総督宮殿　Governor's Palace

街の中心部に位置するイタリアのネオ・クラシカル建築。1899 年に、イタリア人の初代エリトリア総督フェルナンド・マルティーニによって、総督宮殿として建てられました。マルティーニの意向で、緑豊かな庭園に囲まれた正面玄関には、ネオクラシカルスタイルの列柱が作られました。メインホールには、典型的なルネッサンス様式の大階段が設えられ、イタリア産大理石で飾られ、イタリア製やフランス製の家具が設えられていました。第二次世界大戦中に大きな損害を受け、エチオピア時代には、博物館に転用されていました。

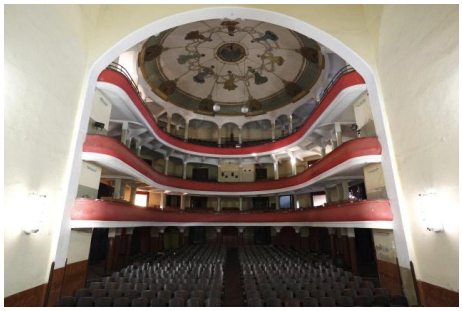
■■■フィアット・ティグリロ　The Fiat Tagliero Building

1938 年にイタリア人建築家 Giuseppe Pettazzi の設計で建てられた飛行機形ガソリンスタンド。30m にもなる片持ち梁式の翼には支柱が全くありません。当時のイタリアの法律では支柱が必要で、設計図には支柱が描かれていました。落成式の二日前、Pettazzi は大工に支柱を外すよう言いますが、落下を恐れて誰も首を縦にふりません。すると彼は翼に昇り、棟梁の頭にリボルバー拳銃をつきつけ、支柱をはずせ！と脅したのです。かつて「世界一豪華なガソリンスタンド」とも呼ばれましたが、スタンドは現在修繕のため休業中です。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

■■■シネマ・インペロ　Cinema Impero

アスマラの顔ともなっているシネマ・インペロは、ハルネット通りにある映画館です。３階建て、２層式バルコニーを持ち、ビリヤードホール、レストラン、カフェバー、店舗やアパート、事務所があり、1,800 名を収容できます。ファサードが特徴的で“CINEMA IMPELO”の文字に囲まれた円形や方形の窓は、1930 年代の映画館建築としては異彩を放っています。ロビーは当時の雰囲気を最も残し、白い大理石の階段も当時のままです。館内も意匠が凝らされ、観客席と舞台を隔てる柱にはライオンの柱頭が、壁には踊り子やヤシ、アンテロープなどアフリカらしいモチーフが化粧漆喰で描かれています。



■■■アスマラ・シアター　Asmara Theater

有名な建築家・技師であった Oduardo Cavagnari の設計で、Anonima Ritrovi Pubblici Asmara 協会とミラノの Dita Dilsizian Freres の共同事業として 1920 年に建てられました。シンメトリーが際立つファサードは、ロマネスクやルネッサンスなど、多様なスタイルが融合し、イオニア式の柱に支えられたローマ・アーチも印象的です。劇場として建てられ 1930 年代に映画館に改装されました。アスマラ初の劇場で、落成当初は市内で最も大きな建物の一つでした。映画館は、1957 年にハイレセラシエの義理の息子（当時のエリトリア代表）に売却されるまで営業していました。現在は再び劇場となっています。

■■■マーケット　Market／Shuq

Shuq と呼ばれるメイン・マーケットは、大聖堂から歩ける距離です。果物や野菜、骨董品、スパイス、卵、家具、陶器、土産物、衣服などあらゆるものが集まっています。周辺にも商店は立ち並び、民族衣装を売る店や、イタリア仕込みの技術でスーツを仕立ててくれるテーラー、車用品屋に写真スタジオと何でも揃います。また、郵便局の向かいにはフィッシュ・マーケットがあり早朝に賑わいます。ここもまたイタリア時代のものであり、紅海からの魚介類を調理する部屋の壁もまた美しいモザイクで作られています。

■■■リサイクル工房　Medereber

聖マリア・コプト教会（Nda Mariam）から数百メートル北へ足を伸ばすと、Medereber と呼ばれるアスマラ名物のリサイクル工房と市場があります。ここでは、廃材利用によって、ありとあらゆる金属製品が作られており、日用食器や七輪（のようなもの）、自転車部品、馬車用品、そして何と教会の十字架まで見つけることができます。場内には、スパイスや雑貨を売る店もあり、雑然とした中に人々の活気に満ちた生活をのぞくことができます。

アスマラのお土産

市内には土産物に特化したお店はありませんが、市場などで素敵なお土産を見つけることができます。インジェラ用の民芸品のカゴは、大胆な色使いが外国人に人気です。上質の綿を使った民族衣装は様々な既製品のほか、仕立て屋でオーダーすることもでき、通常、採寸から数日で出来上がります。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

■■■“戦車の墓地” Tank Graveyard

市街中心部から２km ほど離れた米軍カニュー通信基地跡地のすぐそばに、通称“戦車の墓地”と呼ばれる一角があり、廃棄された大量の戦車や軍用車両などが積み重ねられています。これらは、エリトリア軍によって捕獲されたものや、エチオピア軍が撤退する際に残していったものです。旧ソ連製・アメリカ製などの戦車や軍用車両、対空砲などが、文字通り山積みされており、あたりには何の標識も説明もないものの、圧倒的な廃棄兵器の量が 30 年にわたる独立戦争の苛烈さを物語っています。

■■■連合国軍戦没者墓地 Asmara War Cemetery

1941 年までイタリア領であったエリトリアは、英軍を含む連合国軍とイタリアのムッソリーニ軍の主戦場となりました。1941 年 3 月末、連合軍によってケレンのイタリア軍拠点が陥落し、イタリア軍はアスマラへ追い込まれますが、この一連の東アフリカ会戦の戦没者がここに埋葬されています。連合国軍墓地であるため、墓碑には、英以外にも、南アフリカ、ケニア、スーダン、インド、ウガンダなど多くの国名が見られます。墓苑には植民地時代の名残がいまだ見られ、慰霊塔に正対したメインの場所にはイギリス人兵士たちの墓が、塔に対して右手の一段低くなった場所に、当時のイギリス植民地であった南アフリカ、ケニアなど上記の国々の兵士たちの墓が並んでします。墓地は現在、英国高等弁務団によって維持されています。

■■■アスマラ戦没者墓地／イタリア人墓地

市街中心から 2km ほど、聖マイケル教会の近くには、エリトリア独立のために殉死した人々の墓地があります。手入れの行き届いた整然とした墓地には、ブーゲンビリアに彩られた白い大理石の墓標が、独立戦争のそれぞれの局面・戦闘ごとに区分けされ、整然と立ち並んでいます。隣接して、イタリア人墓地もあり、個人個人の墓のほかに、イタリア風の立派な装飾を施した各家ごとの家屋のような大きな墓が建ち並び、飾られた写真や墓碑などが、イタリア人移民の歴史を静かに物語っています。

アメリカ軍カニュー通信基地 Kagnew Station

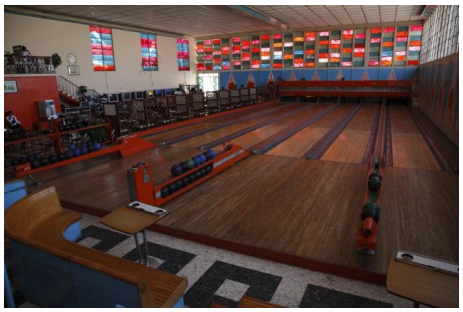
カニュー通信基地は、エリトリア（当時はエチオピア領）におけるアメリカ軍基地でした。1941 年にアスマラ駐留のイタリア軍が連合軍に降伏したことを受けて、イタリア海軍通信基地が接収され、1943 年にアメリカ軍無線基地が設置されました。赤道に近く海抜 2200m というロケーションは、通信傍受には理想的な立地で、カニュー基地は、アメリカ軍第二通信大隊第四分遣隊の拠点となり、冷戦時代の盗聴拠点として軍事上非常に重要な役割を果たします。1960 年代には 5000 人以上のアメリカ人が居住する基地となりますが、アメリカ－エチオピア関係の悪化、エリトリア独立運動の激化、通信技術の進歩などにより、1977 年４月に閉鎖されました。

“アスマラ”の由来

「アスマラ（Asmara）」という街の名前の起源は、アフリカの奴隷制時代にさかのぼることができます。「アスマラ」とは、ティグリーニャ語で「団結」を意味しますが、これは「女たちが男たちを団結させた（Women united men）」という意味をふくんでいます。かつて、エリトリアを奴隷商人が跋扈していた頃、いたいけない子どもたちがその犠牲になってしまうことを嘆き、女（母）たちが、奴隷商人から娘や息子を守るために、男たちを団結させたという逸話からきています。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

■■■ボウリング場／ビリヤード場　Bowling Alley



イタリア人 Feninni によって建てられたもので、世界中を探しても数少ない 1960 年代のボウリング場の一つです。機械化される以前のもので、倒れたピンを立てるのはピンセッターではなく、ピンの背後に隠れているピンボーイなる少年たち。色とりどりの窓ガラスや木製のベンチや、ポップコーンフォルダーがついたテーブルなど、まるで古き良きアメリカへトリップしたようです。裏手には、今も社交場としてにぎわうプールバーがあり、モザイク模様が美しい場内で地元の人々がビリヤードや世間話に花を咲かせています。

■■■Dolce Vita アパレル工場アウトレット

ハルネット通りに旗艦店を持つイタリアン・ファッションの Dolce Vita は、アスマラっ子憧れのブランドです。ヨーロッパに輸出される製品は、仕立ての良さが売りで高価なものですが、アスマラでは工場に隣接して小さなアウトレットショップがあり、品質の良い衣料品を安く買うことができます。主力の高品質シャツから、T シャツやスポーツウェア、子供服、ランジェリーと幅広く扱っています。工場の外壁は見事なモザイク画で、綿花畑から製糸、縫製やデザインまで洋服が出来る過程を描いています。

■■■聖アントニオ教会　San Antonio's Church

1940 年に建てられた簡素化したロマネスク様式の教会。３つのモザイク画は、カトリックと正教の両者が描かれている特筆すべきものです。３つのアーチには、ラテン語で「信」「望」「愛」と書かれていましたが、エチオピア・デルグ時代に外されました。また、エチオピア支配下にあっても、ティグリーニャ語の祈りが捧げられ、教会内部にはエリトリアの旗が隠されていました。現在は、恋の悩みや失くし物に効く教会としても知られています。

アスマラ・グルメ

エリトリアの名物料理、香辛料をたっぷり使ったツァビィと主食のインジェラ（酸味のあるクレープ）は、もちろん、アスマラでは、香ばしいイタリアンピッツァや、新鮮な魚を豪快に焼いたアラビア料理など、各国の味が楽しめます。また、街中のあちらこちらにあるカフェではエスプレッソやフレッシュジュースがおいしく、観光の合間に何度も立ち寄ってしまうことでしょう。アルコールでは定番のアスマラビールとともに、フラスコのような独特のグラスで飲む蜂蜜ワインや、地酒のスワ、香り高いスピリッツのジビブなどが人気です。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

■■■イタリア建築 Italian Architecture

アスマラではイタリア建築が有名ですが、いくつかの有名な場所のほかにも、市内には随所にイタリア建築が残されており、アスマラほど道に迷うことが楽しい街はないでしょう。思うままに自由に歩き回り、思わぬところで素敵な建築物を見つけ、疲れたらカフェで一休み、そんなアスマラ散策が一番のおすすめです。

ハルネット通り南側

ハマセンホテル　Hamasien Hotel

イタリア植民地政府の命により 1919 年に建てられた山小屋風の屋根が特徴的なホテル。ちょっとした坂の上にあり見晴らしがよいです。1940 年代にイギリス軍本部となった時期以外は、ホテルとして使われてきました。1965 年に隣接してアンバソイラホテルが建てられ統合されました。

アフリカ・ペンション　Africa Pension

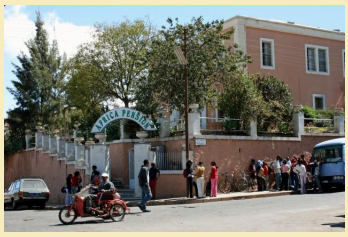
キュビズムを特徴とする邸宅。1920 年にスパゲッティ長者によって建てられたものです。［写真左］

イタリア大使公邸 Residence of Italian Ambassador

かつて Villa Roma と呼ばれました。現在はイタリア大使公邸となっています。大理石の階段、鎧戸、曲線を描く欄干、日陰をつくる玄関ポーチなどが特徴的です。［写真中］

旧スーダン大使館　Former Sudanese Embassy

かつてのアスマラ市の庁舎。近年までスーダン大使館として使われていました。建築年代不詳ですが、折衷主義が流行っていた 1936 年よりも前のものだと考えられています。［写真右］



ハルネット通り北側

Albergo Italia

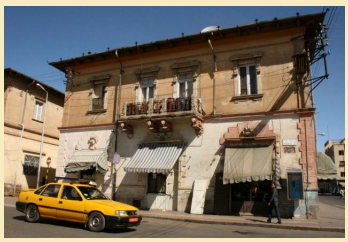
1899 年に建てられたアスマラで最も古い石造建築物の一つでアスマラ最初のホテルです。Keren Hotel と呼ばれた時代もありましたが、近年元の名前に戻り、現在は高級ホテルとして営業中です。［写真左］

エリトリア商業銀行 Commercial Bank of Eritrea

1910 年代に建てられた 3 階建ての事務所で、元々は Eritrean Salt Company でした。イタリアの Military Union、Fascist Youth Movement に占拠された後、ローマ銀行となりました。［写真中］

旧アドゥア広場　Former Adua Square

1910～1920 年代につくられた広場で、ナクファアベニューとケレンストリートが交差する地点にあります。広場を囲む各方向に古いイタリア建築が残っています。広場の東南にある建物は、1922 年に作られ、バルコニー下のライオンの彫像や、天使ケルビムの顔の彫像などが異彩を放っています。ネオ・バロック様式などからヒントを得た、さまざまな様式の折衷であり、バルコニーの曲線が美しい鉄柵などにはアールヌーボーの影響も見られます。［写真右］



©駐日エリトリア国大使館_200911_01

中央郵便局オフィス　Central Post Office

1890～1910 年代につくられた郵便局広場は、アスマラの中心に位置する重要な広場です。当時の軍隊キャンプからほど近くつくられ、後には、都市計画のグリッドの重要な点となりました。広場の南側に建っている緑色の建物が、中央郵便局のオフィスです。地上階には、ローマ風アーチのポーチがあり、その上には、簡素化されたネオクラシカル様式のペディメント、正面にはミラノ製の時計が据えられています。建物内には、重厚な石造りの階段、やアールヌーボー調の鍛錬鉄製の柵などが当時の優雅な雰囲気を伝えています。

エリトリア銀行 Bank of Eritrea

1895～1905 年あたりに作られたと考えられています。当時、アスマラに到着したイタリア人たちを魅了したムーア様式からの影響が見られます。1930 年代にはイタリア銀行となり、エチオピア植民地時代には警察署になりましたが、独立後はエリトリア銀行の本店となりました。シンメトリーが際立つファサードには、地上階には先が尖ったアーチの窓、２階には長方形の窓が作られた美しい作りで、アスマラのネオ・ゴシック様式の見本となっています。

ハルネット通り沿い

観光省　Tourism Ministry

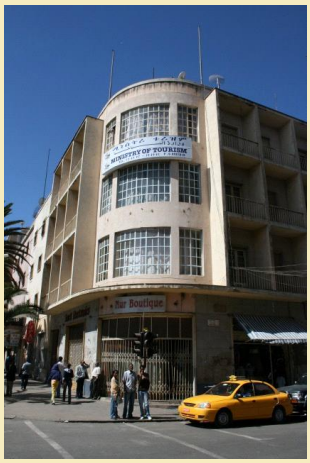
1938 年（推定）に建てられた、元はロイズのビルでした。建物の角の湾曲部に小さなガラスパネルが連なるデザインが特徴的です。

アスマラ市庁　Municipality

1950 年代に建てられた 2 階建てのアスマラ市庁舎。ランダムな緑色のモザイクに彩られた正面の塔には使われたことがあるか定かではありませんが､演説用のバルコニーがあります｡裏手にある議場は、1965 年エリザベス 2 世女王が訪れました。［写真左下］

ファレッタ・ビルディング　FALLETTA building

イタリアの豪商 Salvatore Falletta のために、ハルネット通り一等地に建てられたビル。各階に 12 戸の住宅が入っています。印象的な格子状のデザインは Novecento に影響を受けたものです。1937-38 年に建てられ、1961 年に改築されました。［写真右下］

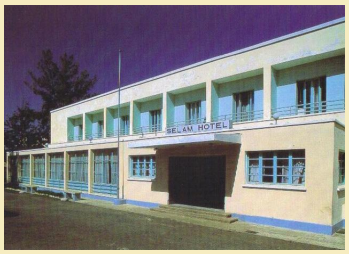


高等裁判所　High Court

1938 年に建てられ現在は高等裁判所・法務省として使われています。当初は、経済局として建てられましたが、イギリス時代に高等裁判所となりました。隣接するアスマラ市庁との間の敷石には、小さな金属円盤がありますが､これは 1960 年代にアメリカ軍が三角測量点として設置したものです。［写真中下］

©駐日エリトリア国大使館_200911_01

アスマラ郊外



セーラム・ホテル　Salem Hotel

東アフリカのイタリア・ホテルチェーン Compania Immobile Albergi Africa Orientale の一つとして 1937 年に建てられた。シンプルな幾何学模様を駆使した合理主義建築の代表例。また、1993 年、国連エリトリア監視団長によって公式にエリトリア独立が宣言された歴史的な場所でもあります。

シェル・ガソリンスタンド　Shell Petrol station

元はイタリアの石油会社 AGIP のガソリンスタンドとして建てられたものです。モダニスト建築の特徴である曲線が特徴的な建物です。建築年代は 1937 年と考えられています。

アスマラ映画館めぐり

芸術を愛することで知られるアスマラの魅力の一つは、1930 年代の香りを今に伝える数々の映画館です。シネマインペロやアスマラシアターの他にも市内には素敵な映画館が残っています。

シネマ･ローマ　Cinema Roma

1937 年と 1944 年に二人の異なるイタリア人建築家によって建てられた映画館(1937 年 Roberto Cappellano、1944 年 Bruno Sclafani)。ファサードには、豪華な大理石がふんだんに使われています。カフェには、現役を退いたイタリア Sorani 社製の 35mm 映写機が展示されており、壁面のかつての上映作品のポスターなどと共に、クラシカルな雰囲気を醸し出しています。

オデオン・シネマ　Odeon Cinema

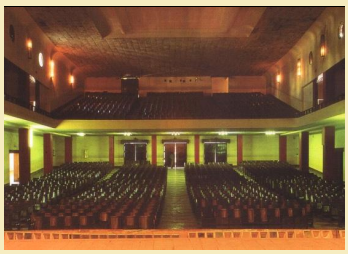
1937 年に、建築家 Guiseppe Zacche、Guiseppe Borziani によって設計されました。ファサードは究極的なシンプルさを目指し、張出し屋根の下には、ロビーへ続く 7 つのドアが設けられています。ロビー南側には、写真集などによく登場するアスマラで最も有名なカフェがあり、アールデコ様式の華奢な家具や、花形のガラスで囲まれたライトなど随所に凝らされた意匠を楽しむことができます。

キャピトル・シネマ　Capital Cinema

1938 年に東アフリカのホテル会社 CIAAO のために建てられました。デンデン通りに面するファサードは 1944 年の改装以来、その姿を変えていません。1800 名収容の大ホールは、驚くべきことに天井の中央は格納式で、換気とともに星空の下で映画を見ることもできる構造になっています。現在はリノベーション中です。

シネマ・ダンテ　Cinema Dante

アスマラで一番古い映画館。1930 年代のブームが到来する以前のアスマラの映画館の規模はこのようなこじんまりとしたものでした。古きよき時代の趣が味わえます。



※　現地情報の更新には努めておりますが、掲載されている情報の中には、最新ではないものが含まれる可能性があります。ご旅行の際には、各自の責任で最新情報をご確認下さい。また駐日大使館は旅行中のトラブルに関し一切の責任を負いません。

©駐日エリトリア国大使館_200911_01